

あなたが船を選んだのは



函館市医師会
函館渡辺病院

水 関 清

日本の鉄道連絡船の始まりは、1882（明治15）年に開業した琵琶湖航路とされる。東海道線の連絡のために、滋賀県の天津と長浜の間を結んだ航路であり、その後各地で同種の航路が次々に開業した。中でも、本州と九州・北海道・四国との間を結ぶ、1901（明治34）年開業の関門・1908（明治41）年開業の青函・1910（明治43）年開業の宇高の3連絡船は、本州と3島との間を結ぶ大動脈となった。さらに、その後の鉄道輸送需要の増大に伴って、貨車を連絡船に直接積みこむ画期的な方式が採用されるようになり、本州・九州間の関門航路は下関～小森江間の関森（かんしん）航路に名を換えて1922年から、本州・北海道間の青函は1925年から、本州・四国間の宇高は1930年から、それぞれに物流の要として鉄道黄金時代の一翼を担うこととなった。

陸上交通における車両の役割がその重みを増すにつれて、鉄道連絡船の役割は、トンネルや橋に取って代わられた。本州・九州間には、1942年に鉄道トンネル、次いで1958年に道路トンネルが開通したことで、1964年には関門航路が廃止された。1988年3月13日には、青函トンネル運用開始に伴って青函連絡船の定期運行が、同年4月9日には本州・四国間を島づたいに結ぶ6本の橋がかかって、高速艇を除く宇高連絡船の運行も終了した。この結果、関門間と青函間はそれぞれ鉄道トンネル経由で、本四間は鉄道道路併用橋経由で列車が走り始め、北海道から四国や九州までが鉄道で結ばれることになった。その運用のさまを、「一本列島」という惹句で周知されたことは記憶に新しい。

連絡船をはじめとする、船での旅立ちを彩るのが、色とりどりの紙テープである。「蛍の光」の演奏とドラの響き。そして送る人と送られる人を結ぶ五色の紙テープ。宇高連絡船でも、青函連絡船でも、往く者と残る者がその思いを色とりどりのテープに託した見送りは、危険防止を名目に禁止されてしまい、今その光景はわずかに豪華客船の出航時や、離島航路が発着する港で、3月の頃に見られる程度になっている。こうした見送りには、紙テープを介した「別れの握手」という意味があり、世界中で行われている出航の風物詩的存在であるが、その始まりは1915年のサンフランシスコ万博での客船出航時の見送りであったという。

まず、送られる人々が船上から陸の方に向けて紙テープを投げる。次に、陸で見送る人々が、これを受け取ってテープの芯の穴の中に竹の棒を差し込む。こうすると、テープを持つ手が傷つかないので

ある。船が岸壁を離れると、テープは海の方に向かって、一旦ゆるやかに弧を描く。離岸した船が徐々にスピードを上げて、遠ざかっていくとともに、テープは張りを取り戻してどんどん伸ばされていき、芯がカラカラと回る。やがて紙テープが無くなると「お別れ」の時が来る。離岸時には、まだしっかりとその輪郭が捕えられていた船上の人の顔は、既におぼろげとなり、船の輪郭と重なり、やがて水平線の彼方に溶け込んでいく。

8年間の離島診療所勤務の時代には、送る側と送られる側の双方の経験をさせていただいた。島を出ていく人は、小学校の教員、駐在所の巡查さん、地元の高校を卒業して就職・進学先へと羽ばたいていく学生たち、そしてさまざまな理由で島を離れる老人たちであった。学校の先生方への見送りは、盛大であった。最初のうちは走り回り、はしゃぎ通しかった子どもたちが、繰り出されていくテープの長さに反比例しておとなしくなり、ついには泣き顔になって、小さくなっていく船影に手を振る姿には、胸に迫るものがあった。酒屋はあるが本屋がなく、宅配便もタクシーも救急車も来ず、急患発生時には自らが指揮を執って、漁船を搬送船に仕立てて、救急処置をしながら本土の医療機関に送るといふ、今思えば身の竦む離島診療所勤務であったが、搬送を終えた後、島への帰りの漁船の上での、搬送に協力していただいた島民の方々との語らいの時間は、忘れがたい。救急車さえ患家に呼べない離島の暮らしをひと通り嘆いた後で、話に出てくるのは、いつも温暖な島の気候自慢であり、島で採れる魚の新鮮さ・柑橘類のみずみずしさであった。そして、「一人暮らしでも急病の時には駆けつけてくれる隣人の存在に代表される、島民の気立ての良さ」であり、「島の外に出かける時にも自宅に鍵をかけなくてよい、島の治安の良さ」であった。

そんな人心の優しさに馴染みながらの診療所勤務を終えて、本土の診療所に転任するために、家族そろって連絡船に乗った時のことは、さらに忘れがたい。テープを手に見送ってくださる方々の姿が小さくなっていくのを、今度は船上から見つめたのである。離岸した船が、埠頭から灯台の間を抜けて島と本土とを隔てる海峡に進み、岬を回り込む航路へと差しかかる頃、どこからか聞き覚えのある声が聞こえる。目の前の海を隔てて、埠頭は遙かに遠い。

先ほど抜けてきた灯台のたもとの消波ブロックの上に人影が見える。校医を務めていた小学校の子どもたちだ。埠頭から伸びる堤防の上を倒けつ転びつして近づいてくる子どもたちの姿がそれに続く。なるほど、こうすれば堤防に並行して航行する連絡船に、もう一度近づけるのだ。呼びかけに応えようとしても、涙で詰まって声にならない。ただ、頭を下げるしかなかった。

♪あなたが船を選んだのは

私への思いやりだったのでしょか♪

名曲「海岸通り」の一節である。視界の中で小さくなっていく船を、いつまでも見送る。船での別れには、思いやりという影がいつも寄り添っているのである。